

住居における公室の計画に関する研究

鈴木 成文
初見 学

目 次

はじめに

1. 研究の方法

- 1-1 調査の概要
- 1-2 分析の方法
- 1-3 居住者の属性

2. 私室の形成と余室の使われ方

- 2-1 私室の形成
- 2-2 余室の使われ方

3. 公的生活の展開と公室の使われ方

- 3-1 公室構成と公的生活の展開
- 3-2 公的生活の展開と住意識

4. 公室の計画

- 4-1 公的生活の展開と公室計画
- 4-2 デュアルリビング

あとがき

はじめに

戦後、食寝分離を目標に誕生したDK型住戸は、居間の確立を目標にLDK型住戸へと住戸規模の拡大を伴いながら発展してきた。都市における住戸の近代化は、住み方調査を基に設定された計画目標を次々と現実化してきた公共住宅の先進的役割に負うところが大きい。現在では一般の住宅にもDK<リビングルーム>という言葉が定着しつつある。生活水準が向上し住まいに対する関心も高まりつつある今日、人々は、ゆとりある生活を楽しめるような、自分の生活様式に合った住居を求めはじめている。しかし、現実の住居をみると、LDKと名付けられた公室といくつかの私室が計画されているものの、それらは単に数の上で存在するだけといった、生活イメージの乏しいものが少なくない。私室と同程度の面積しか与えられず家族が集まり様々な行為が展開されるにはいかにも狭い<居間>、窓も無く台所の一隅といった感じで食事を楽しむ雰囲気には程遠いDK、公室が狭いにもかかわらず客用寝室として計画されるあまり使い途のない第4番目の居室等住戸規模や生活水準に相応しいとは考え難い質の低さがそこには見られ

る。これらは、居住者の住要求に基づく具体的な公室計画の理念・目標が欠如していることに帰因すると考えられる。

私室の確立がほぼ達成された現在、質的低さの目立つ公室についてその在り方を考えることは重要と考える。本研究は、実態調査を基に、住戸規模および人々の生活に相応しい公室計画の理念を確立することを目的とする。

1. 研究の方法

1-1. 調査の概要

これからの住まいにおける公室の在り方を考えるにあたり、規模の拡充した最近の集合住宅の公室での生活の実態と問題点およびその背景となっている住意識や住要求を探ることを調査の目的とした。

調査対象としては、居間的空間が計画されていて公室構成に特徴のある住戸を有する12団地を選んだ。住戸型は3LDK・4LDKが中心で、住戸規模はほぼ80~100㎡の範囲に入る。核家族の事例を分析対象とし、総事例数は225例。調査対象の団地・住戸型等については表1に示す。又、調査対象住戸の平面は図2.1~図2.16の「住み方の事例」を参照されたい。

調査方法は、アンケート用紙の留め置き・回収および回収時のインタビュー・公室の家具配置実測を原則とした。アンケートでは、家族の属性・入居時期・定住の意向・各室の使われ方・室名称呼・広くしたい室・LDKの分節希望・和室の要求といった質問を設け、インタビューで設問に対する回答の理由・公室の使い分け・公室での起居様式を中心に住んでみての感想等を幅広く訊ねた。〈高野〉〈諏訪〉〈永山〉〈楽園町〉では、各室についてきちんと整えておくよう心掛けているかどうかの設問を加え、北側に居間をもつ〈高野〉〈楽園町〉では、北側公室に関する評価をインタビューで訊ねた。

調査は東大鈴木研究室を中心とするグループにより、1979年7月・9月と1980年7月に実施された。

1-2. 分析の方法

住み方は、住生活上のいろいろな要求が複雑にバランスした結果として出現し、そのバランスは居住者の価値

表 1. 分析対象住戸一覧

団地名	所在地	種別	住棟形式	住戸型	住戸規模 (M ²)	分析戸数 総住戸数	入居時期	調査時期
石神井	東京	公団分譲	中層	3 LDK フラット	79	22/490	1966	1979. 7
行徳	千葉	民間分譲	低層・接地	3 LDK 2層	75～80	14/ 38	1978	1979. 7
南桜井	埼玉	民間分譲	低層・接地	3・4 LDK 2層	79～89	23/ 85	1979	1979. 9
高野	京都	公団分譲	低層・接地	3 LDK 2層	78～81	35/120	1980	1980. 7
八事	名古屋	公団分譲	低層準接地	3 LDK メゾネット	90～94	19/ 92	1979	1979. 7
下細井	前橋	公営賃貸	中層	3 DK フラット	61	17/120	1978	1979. 9
庭代台	大阪	公社分譲	低層・接地	4 DK 2層	90	14/ 40	1976	1979. 7
名谷	大阪	公社分譲	低層・接地	4 DK 2層	80	13/ 96	1976	1979. 7
諏訪	東京	公団分譲	低層・接地	3 LDK 3層	88	12/ 53	1979	1980. 7
浦安	千葉	民間分譲	低層・接地	4 LDK 2層	99	19/ 48	1979	1979. 7
永山	東京	公団分譲	低層・接地	4 LDK 2層	99	12/102	1980	1980. 7
楽園町	名古屋	公団分譲	低層準接地	4 LDK メゾネット	97～98	25/ 36	1979	1980. 7

観によって異なる。又、面積や室数に余裕がでてくるに従い住み方の自由度は増大する。このように居住者によって異なる住み方決定の複雑なメカニズムを、多様に展開している住み方の実態を通して理解するには、調査事例一例毎に住生活をいろいろな角度から見た結果を総合して判断する作業が不可欠である。このとき、インタビューを通じて得られた調査者の実感は、主観的ではあるが重要な判断基準の一つとなる。

次に、住まい方や居住者の住宅に対する考え方は、現在住んでいる住宅の規模・室構成といった建築的要因に影響される面が強い。このため、特定の住戸タイプにおける住み方の実態のみから住要求・住意識の基本的動向を判断するのは危険であろう。調査対象に異なる複数の住戸タイプを選び、そこにみられた実態を住居平面との関係で捉え、相互に比較してみる必要がある。

以上のような観点から分析方法は、(1)、団地別、言い換えればプランタイプ別のケーススタディ (2)、ケーススタディの比較分析 の2段階とした。具体的には、(1)では、調査事例一例毎の検討を基に、ある一つの平面型での住み方の一般的傾向、および少数であっても特徴的な住み方を抽出し、各々その住み方の背景となっている住意識・要求を推察する。(2)では、各タイプを比較しつつ平面構成が住生活に与える影響、およびそれを考慮した上で住意識・住要求の動向を、(1)の特殊例も含め考察する。尚、ケーススタディの詳しい内容については研究報告書を参照されたい。

1-3. 居住者の属性

分析対象はその殆どが都市に住む平均的サラリーマン世帯であった。〈高野〉では医師・自営業等サラリーマン以外のものが約3割みられたが、その他の11団地では9

割以上が会社員や公務員といったサラリーマンを世帯主としている。表2は分析対象住戸の家族型の分布を団地別に示したものである。公営賃貸で住戸規模の小さい〈下細井〉では長子が3才以下か子供のいない若い世帯のみ、民間分譲の〈行徳〉〈南桜井〉では長子が小学生以下の若い世帯が多い。逆に成長した家族の多いのは〈楽園町〉と入居開始後15年の経つ〈石神井〉で、〈高野〉は若い世帯から成長した世帯まで広く分布している。これら以外の6団地では長子が小中学生の世帯が分布の中心を占める。家族人数については、4人が52%と過半数を占め、次いで3人が24%、2人が13%、5人が10%となっている。尚、分析は核家族の事例について行なったが、調査対象中には複合家族・欠損家族の事例が14%程あった。

表 2 家族型分布

団地	Co ⁺	Cb	Ci	Cj	Ck	Cs	Ca	Cmf	Cō	計(その他)
石神井	1	・	・	・	2	3	6	7	3	22 (2)
行徳	1	7	2	1	2	・	・	1	・	14 (4)
南桜井	2	3	8	6	2	1	・	1	・	23 (4)
高野	5	7	7	4	1	4	・	6	1	35 (4)
八事	2	2	・	4	2	1	4	3	1	19 (1)
下細井	7	10	・	・	・	・	・	・	・	17 (0)
庭代台	・	・	2	3	1	4	1	2	1	14 (3)
名谷	・	1	2	1	2	3	2	1	1	13 (5)
諏訪	・	1	2	2	2	3	2	・	・	12 (2)
浦安	1	1	4	3	4	4	2	・	・	19 (3)
永山	1	1	2	2	4	1	1	・	・	12 (3)
楽園町	1	1	・	5	6	4	2	5	1	25 (5)
計	21	34	29	31	28	28	20	26	8	225 (36)

2. 私室の形成と余室の使われ方

本研究は公室の計画を中心課題とするが、就寝室として使える室が3～4室ある分析対象住戸では、そのうちの何室かは非就寝室（以下「余室」と呼ぶ）となり、公室の利用も予想される。このため本章では、私室形成の実態、見方を変えれば余室の出現のしかたおよびその使われ方について概観しておく。

2-1. 私室の形成

私室数に余裕のある3～4LDK住戸における私室の分解を4人家族の場合についてまとめたのが表3である。長子が小学入学以前は家族全員が一室に就寝するのが一般的で、母親と子供達が一室に就寝し主人が別の室に寝るという例も多い。親子の就寝室分解は、長子が幼稚園に入る頃から始まり、小学上級頃にほぼ完了する。子供の就寝室分解は、長子が小学低学年頃から始まり、中学入学頃には分解する例が同室の例を上回り、高校ぐらいではほぼ完了する。長子が中学生であっても就寝室の分解しない例では2人の子供が同性の場合が多い。上記の傾向は3人・5人家族でもほぼ同様であるが、5人家族の場合、同性の2人が一室に就寝する例が多い。

夫婦寝室には、LDK以外で収納を含めて一番広い室を充てるのが一般的で、同程度の広さの2室がある場合には、洋室より和室のほうを、北向きより南向きの室のほうを充てる傾向がみられた。夫婦寝室に和室の例が多いのは、子供室の洋室化が先行し（分析事例中約9割が洋室を希望）それとの関係で和室となる場合もあり、夫婦寝室自体の和室要求は必ずしも強くない（分析事例中約6割が和室を希望し残り4割は洋室を希望）。夫婦寝室を和室にするか洋室にするかという問題は、住戸全体の中で和室を残すならどの室がよいかという視点から検討する必要がある。

表3 私室の分解（4人家族の場合）

	Cb	Ci	Cj	Ck	Cs	Ca	Cmf
 親子同室	77 (23)	39 (9)	•	5 (1)	•	•	•
 夫婦の分離	13 (4)	39 (9)	21 (5)	5 (1)	•	•	•
 親子の分解	7 (2)	17 (4)	58 (14)	70 (13)	26 (5)	•	6 (1)
 子供の分解	•	•	13 (3)	10 (2)	63 (12)	100 (11)	94 (17)
 その他	3 (1)	5 (1)	8 (2)	10 (2)	11 (2)	0	0
計	100	100	100	100	100	100	100

註) 単位は%, () 内は例数, Cbは3人家族の場合

子供室は子供達の成長とともに分解してゆく。分解が完了する前の時期には、一室に複数の子供が就寝し、余室の一つを勉強室やプレイルームとする住み方もみられた。室をはじめから個室として細分化せず、個室要求の強まった時点で分けられるような順応性を持たせて計画すれば、この室の利用可能性は増大する。2室を続き間で計画した〈石神井〉では、二室を一体にして広々とした夫婦寝室や複数の子供達の室としたり、2室に分けて子供の個室としたり、家族構成や家族の成長に合わせた様々な使い方がみられた。又、事例は無かったが若い世帯で家族が一室に就寝する場合にも使い易い。

2-2. 余室の使われ方

LDK以外に3～4室を有する住戸では少なくとも1～2室の余室を持つのが一般的である。分析対象の事例では約8割が一室以上の余室を持っていた。

調査から得られた余室の使われ方を大別すると、

- ① 団らんやくつろぎの場としての利用（F系）
- ② 客を通してもてなす接客室の利用（G系）
- ③ 主人や主婦の読書・書きもの・趣味・仕事や、子供の勉強・遊びの場としての個人的利用（P系）
- ④ 客の宿泊・アイロンかけ等の家事・納戸といった予備室の利用（S系）

となり、一つの室にこれらの利用が重複する例も多い。客の宿泊を別にすると、P系（主婦室は除く）やG系の利用が多く、次いで納戸の利用が多い。これらより少ないがF系の利用も約1割強の住戸にみられた。余室の利用には、余っているの使っているという消極的なものから、現状のLDKや私室では満たされない行為のための積極的利用までの幅があり、余室の広さや住戸内での位置によってその利用は異なる。このため上記の利用を住要求の強いあらわれと考えるのは早計であるが、あるレベルでの住要求とみることは可能である。

余室の使われ方は、様々な住要求の他に広さや他室との関係によって左右される面も強い。分析対象には2層住戸が多く、余室が公室階にあるか私室階にあるかによってその利用には差異がみられる。室の広さや和洋のつくりにもよるが、概ね公室階の余室ではG系の利用が中心で、私室階の余室ではP系の利用が多くG系の利用は少ない。3LDKの2層住戸で1つの余室を持つ場合を例にとると、私室階に3室ある住戸では余室の利用はP系が多い。又、私室階に2室の住戸では、上下階で公私を分ける住み方も親子を分ける住み方も可能で、前者では公室階に余室が生じG系中心の利用となり、後者では私室階は子供のゾーンとなりそこに生じる余室の利用はP系が多い。このように、余室となる室は私室の占有状況に左右され、その利用は位置によってある程度規定されることを計画の際には留意しておく必要がある。

3. 公的生活の展開と公室の使われ方

3-1. 公室構成と公的生活の展開

住居内における公的生活として、食事・団らん・接客を主要なものとして採り上げ、各生活が室との関係でどの様に分節・結合しているかを分析の軸とした。各行為には下記のように略号を付け、室名を表わすL・D・Kとは区別する。尚、団らんに使われる室は一室に限らず数室のこともあるが、ここでは家族の団らんの中心となる室にFをつけ、接客については、日常の家族生活の場へ招き入れても構わない気のおけない客は対象とせず、生活上問題となりやすい改まった客の応接をGとした。

E……食 事（朝夕で室の変る場合は夕食）

F……団らん（日常的な団らん）

G……接 客（改まった客との応接）

分析事例中にみられた公的生活の分節は、食事・団らん・接客の全てを一室で行なうEFG型、食事が別室のE-FG型、接客を独立させたE-F-G型、各生活が独立したE-F-G型の4パターンであった。時々、或いは場合によっては団らんに使うこともある室にFをつけると、E-F-FG型やE-F-F-G型も多く、両者の分節は近似したものと考えられるが、各室に対する意識に差が認められるため、大きくはFを除いて分類した。

各団地の、公室構成と公的生活の分節パターンとの関係を表4に示す。前章で述べたように余室が公室として使われることも多いが、ここでは仮に3室を私室とし、LDK以外に4室を持つ場合には4室の中で一番公室となりやすい室も公室とみなし表4のように公室構成を分類した。尚、nDK型住戸では、DKに近接した室がL的に使われることが多いためL-DK型に含めた。

以下、団地別、云い換えれば公室構成の型別に公的生活の展開の様子およびそこでの問題点を概括する。

〈石神井〉 成長した家族が多いため私室数に余裕がないことも一因し、公的生活の展開はワンルームのLDK（約15畳）に食事・団らん・接客が集約されるEFG型が殆どである。LDKには食卓・ソファを配する例が多く、ソファを接客時にも使えるように整えて配置するため、LDKは家具で埋め尽くされる。「洋式にしつらえたLDKは窮屈」「LDKには炬燵を出す余地がない」といった理由で、寝室として使っている和室を副次的団らんの場とする住み方も若干みられた。LDKワンルームの公室は、食事と団らんの連続性や家族の一体感がある点で、家族の日常生活の場としての評価は高い。しかし、来客時には「台所を見られたくない」「家族のいる場所がない」といった問題があり、半数以上の家がカーテンや食器棚で台所を隠している。これらのことは、LDKの分節希望にも表われており、他団地に比してLD-K希望が多いがLDK希望は皆無であった。（表5）

〈行徳〉 公的生活の展開は、全例とも2階にある9～12畳のLDでのEFG型であった。若い世帯が多く、大半の家が1～2の余室を持つが、公室階にある広い洋間は主寝室化しやすく、LDやKと離れた1階和室を公的生活に使う例は少ない。又、台所が独立しているためLDでの接客に不都合は少ない。奥に細長いLDでは、明るい窓側に食卓、奥にソファを配す例が多い。幼児のいる家では、ソファの配置を崩し中央に子供の動き回れる空間を生み出す傾向がみられた。LDKの分節希望では、L-DK希望が強いが、LD-K希望も他団地に比べると多い。L-DK希望は「Lは汚れやすい食事室と分け

表4 公室構成と公的生活の分節

公室構成	団 地	住戸型	公 的 生 活 の 分 節				計
			EFG	E-FG	EF-G	E-F-G	
LDK	石神井	3LDK	21 (95%)	・	1 (5%)	・	22 例(100%)
LD-K	行 徳	3LDK	14 (100%)	・	・	・	14 例(100%)
L-DK	南桜井	3・4LDK	2 (9%)	21 (91%)	・	・	23 例(100%)
	高 野	3LDK	3 (9%)	20 (57%)	6 (17%)	6 (17%)	35 (100%)
	八 事	3LDK	・	14 (74%)	2 (11%)	3 (15%)	19 (100%)
	下細井	3DK	12 (80%)	3 (20%)	・	・	15 (100%)
	庭代台	4DK	・	4 (29%)	7 (50%)	3 (21%)	14 (100%)
	名 谷	4DK	・	3 (23%)	10 (77%)	・	13 (100%)
L-D-K	諏 訪	3LDK	3 (25%)	5 (41%)	2 (17%)	2 (17%)	12 例(100%)
L-DK+和	浦 安	4LDK	・	16 (84%)	1 (5%)	2 (11%)	19 例(100%)
LDK +和	永 山	4LDK	5 (42%)	・	7 (58%)	・	12 (100%)
LDK +洋	楽園町	4LDK	2 (8%)	7 (28%)	16 (64%)	・	25 (100%)

註) <下細井>には上記以外の分節パターンが2例あり表中には含まれていない。

てきちんとしておきたい」「接客時に家族の食事できる場が欲しい」「DKは便利」といった理由による。住み方にも、余室をプレイルームに充てLDを整えておこうとする例がみられた。食事と団らんの一体性を評価する一方、整った室も欲しいという意識が感じられる。

〈南桜井〉 LとDK（計約12畳）に連続性のある公室構成はLDK型とL-DK型との中間に位置する。ここでの公的生活の展開は、DKとLとに生活の対応したE-F-G型が多く、少数ではあるがLで坐式の生活をするE-F-G型もみられた。足を投げ出して伸び伸びとくつろぎたいとする家では和室の余室を副次的団らんの場としているが、全体には余室の公的利用は少ない。これは、余室が非公室階に多く生じること、公室階に生じる余室は4畳半と狭いことによる。LとDKの構成には図1に示す2タイプがある。AではLとDKの一体感が強く客との食事はDKの利用が多いのに対し、Bでは台所とやや切れたLの利用が多い。LDKの分節についてみると、現住居の公室構成を反映し、LD一体希望はAタイプに多い。両タイプでLとDKの狭さに大きな差はないが、AではDKを、BではLを狭いとする意見が多い。AではDK部に喰い込むことでLの狭さを緩和できる反面、DKが圧迫されるためと考えられる。

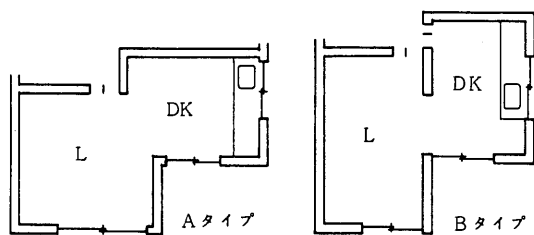


図1 〈南桜井〉の公室構成

〈高野〉 LとDK（計14畳）とが半階ずれ、空間的には連続しているが公室構成はL-DK型と考えられる。公的生活の展開はDKとLとに生活の対応したE-F-G型が約6割を占め、他にE-F-G型やE-F-G型もみられた。京都という土地柄から伝統的住様式が根強く残り、半数以上がくつろぐ時には和室を希望している。E-F-G型におけるLでの起居様式をみても約半数が坐式か折衷式である。E-F-G型以外の展開では1階6畳和室が公的生活の場として活用されている。E-F-G型では1階和室で団らん、Lで接客という住み方が多い。狭いDKで食事をせずLを坐式で使い食事・団らんの場とする住み方もあり、この場合、E-F-G型では1階和室が接客に使われ、E-F-G型ではLが接客の場も兼ねる。坐式団らん指向、食事と団らんの一体性あるいは接客室独立の要求が1階和室の利用を高め多様な公的生活展開を生む原因となったと考えられる。

〈八事〉 LとDKをはっきり分けた公室構成で、Lが7畳半のAタイプと11畳のDタイプを分析対象とした。公的生活の展開は平面通りのE-F-G型が大半を占める。

Aタイプではこの他に、余室となった公室階の和室を接客に使うE-F-G型が若干みられた。E-F-G型ではFGの重なるLを狭いとする例が多いが、E-F-G型ではFのみのLに面積的不満は少ない。又、前者ではL-DKの分節希望が多いのに対し、後者では接客室が別に確保できるなら食事と団らんの場は一体にして広く使いたいとの考えから、LD-Kの分節希望が多い。

次に、DタイプではE-F-G型の展開が殆どない。広いLには、ソファを整えた椅子式の場と坐卓を置いた程度の広い坐式の場の二つが形成される例が多い。客との食事にはこの坐式部分がよく使われ、家族の食事の場が侵されることはなく接客時の不都合は少ない。余室がある場合にも接客室が独立しないのは、余室が非公室階に生じやすいことやLでの接客に問題の少ないことその他、Lが余室の倍程度の広さを持つことも一因であろう。

〈下細井〉 順応型の3DK住戸で、収納ユニットを移動することにより、住戸の南半分をDK+洋室にも16畳のLDKにもすることができる。乳児一人又は子供のいない若い世帯が多いため、南の洋室までも私室として使う例はなく公的な利用が多い。南側を2室に分けて使う場合の公的生活の展開は、8畳のDKに置いた食卓を夕食には使わず、洋室を坐式で利用し夕食・団らん・接客の場とするE-F-G型が多い。くつろぐ時の坐式指向・食事と団らんの結びつきがこの様な〈茶の間〉的公室利用を生んだと考えられる。この他、DKで食事、洋室で団らん・接客をするE-F-G型やDK中心のE-F-G型があり、E-F-G型の洋室での生活にも坐式・折衷式が多くみられた。南側をワンルームにして使う例は約25%にのぼるが、ここにも坐式だんらんの生活がみられた。居間にはソファを置くのが大都市の例では一般的であったが、ここでは、経済的理由による家具の未購入、洋室の狭さ、幼児のために室を広く空けておくといった理由の他に、地方都市における坐式指向の強さが感じられる。

〈庭代台〉 住戸1階に8畳のDKと6畳の洋室を持つ4DK型で、この洋室を私室とする例はなくL的に使う例が多い。公的生活の展開は、E-F-G型が半数、残りはE-F-G型とE-F-G型である。E-F-G型とE-F-G型とは似た展開であるが、前者では洋室を「応接間」後者では「居間」と呼ぶ家が多く、意識の上では差がある。E-F-G型では洋室で団らん、2階和室で接客をする例が多い。洋室にFやFとGが重なる例では狭いという不満が強いが、Fのみの例では不満はない。E-F-G型の多い理由として、接客を意識してソファ

をしつらえた洋間は家具であふれ、くつろいだ団らんには使いにくいことが挙げられるが、洋室を坐式で使う例もあり、食事と団らんの一体指向や接客に使う室をきちんとしておきたいという意識の作用も考えられる。

客との食事に約半数が不便な2階和室を使っている。これは、ソファでの食事が難しいことや台所を見せたくない気持があることによると考えられる。

〈名谷〉 住戸は4DKで、1階に8畳のDKと公室として使われることの多い6畳の和室を持つ。公的生活の展開は、DKで食事・団らん、和室は接客が中心となるEF-(F)G型が約6割を占める。少数ではあるが、2階の洋室にソファをしつらえ応接間とするEF-G型もある。他には、DKは食事が主体で和室を団らん・接客に充てるE(F)-FG型が約2割の住戸にみられた。DKを団らんの場とする例が多いのは、1階和室が北側にあることやDKが南側にあり若干広いことが大きく、これに食事と団らんの一体性・接客室確保の要求が重なった結果と考えられる。1階和室は坐式で使われることが多いが、接客を主とする場合にはソファを配置する例もあり、前述の2階応接間の例も考え併せると、客を通す室にはソファを置きたいという要求の存在が感じられる。1階和室を接客に使う場合、客との食事や客の宿泊といった面で洋室の接客室にはない融通性が認められる。

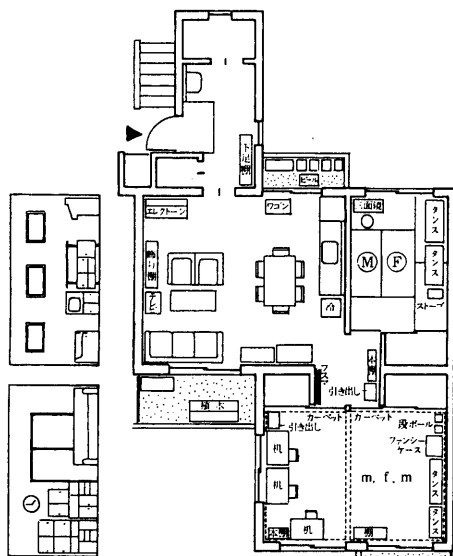
〈諏訪〉 接地型3層住戸の1階には、7畳のLと4畳のDおよび台所が各々独立して計画されている。公的生活の展開には様々な型がみられ、計画意図通りのE-FG型の住み方は過半数に満たない。狭いDを使わずLで食事・団らん・接客を行なうEFG型の例には、現在の住み方を評価したLD-Kの分節希望が多くみられた。この他、Dが食事・団らんの中心となりLは接客を主とするEF-(F)G型、Lを接客主体の場としDで食事をして2階和室（私室の場合もある）で団らんするE-F-G型がみられた。このような多様な展開を生んだ最大の要因は、細分化されたL・Dの狭さにあるが、ここにも接客室確保指向や食事と団らんの一体要求を読み取ることができる。尚、Lを接客中心とする例では、ソファを整えて配置した椅子式が多く、Lに団らんの色彩が加わるに従い折衷式が増える傾向がみられた。

〈浦安〉 2階に3室、1階に7畳のDKと9畳のLおよびLに連続した6畳の和室を持つ4LDK型住戸で、最近の戸建て住宅にもよくある室構成をとっている。公的生活の展開は、DKで食事、Lで団らん・接客というE-FG型が約8割を占める。1階和室が余室となる例は多いが、客はまずソファのあるLへ通し、食事を共にする場合に和室かDKへ移るのが一般的で、和室を接客

専用室にする例は少ない。1階和室は客の宿泊用に空けておくことが多く、アイロンかけや書斎に使われることがある程度で、団らんに利用されることは少ない。Lのしつらえをみると、壁量の少なさから和室との境にソファを並べる例が約半数あり、この場合、和室をLと一体に利用しにくい。分析対象のDKには側面に窓の有るタイプと無いタイプがあり、前者でのDKの室名称呼は「食事室」が「台所」を上回り、窓際に食卓を寄せる例が多く、食事の場における窓の重要性を示している。

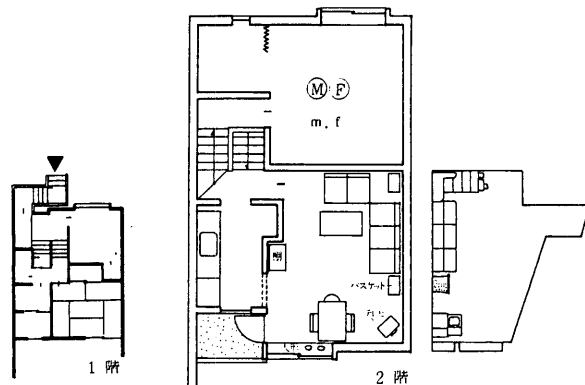
〈永山〉 前例と同じ4LDKであるが、LDKがワンルームである点、1階和室が北側に位置する点で異なる。1階和室を私室とする例が少ないのは同様である。食事と団らんに食卓とソファを配置したLDKで行なわれ、公的生活の展開は、改まった客を和室に通すEFG型と、LDKに通すEFG型に分かれる。EFG型ではソファを対向型やL型に配置し「室を常にきちんとしておきたい」とするのに対し、EF-G型では「きちんと」意識は弱くソファの配置も床に坐ってのくつろぎが可能なものが多い。食器棚等で台所を隠そうとする例はEFG型に多く、客に台所を見られたくないという意識は強い。1階和室は、和室としての質が高くないことやソファのある室に客を通したいという意識から、改まった客を通す場として必ずしも安定していない。又、客用寝室として空けておかれるのが一般的で、団らん等の利用はなく、日常生活においては殆ど使われていない。

〈楽園町〉 主階北側に12畳のLDK、南側に7畳半の洋室と6畳の和室があり、LDKの間仕切りと洋室の組み合わせで様々な公室要求に対応できるように計画されている。食事にはLDK、接客には洋室を使う例が殆どで、公的生活の展開は、LDKを団らんの中心とするEFG型が約6割、洋室をその中心とするE-FG型が約3割を占める。E-FG型はLDKの半分を子供室とする例に多い。団らんの場については、EFG型では「きちんと」意識が弱く坐式・折衷式が多い（食事は椅子式）のに対し、E-FG型ではソファを整えた椅子式が多い。EFG型では、接客室である南洋室を落ちついた居間として普段も活用している点が前の4LDKの事例と異なる。南洋室が接客室として安定し日常的にもよく使われるのは、南側に位置しある程度の広さを持つことや、隣の和室（夫婦寝室例が約半数）との連続性によるところが大きい。又、LD-Kの分節希望がこの型には多く、現在の住み方にある程度満足している結果と考えられる。幾つかの可能性の中からEFG型の展開が多く出現したのは、きちんと整えた室の確保要求と、多少散らかっても家族にとって使い易い室に対する要求とが、平面計画とうまく一致した結果と考えられる。



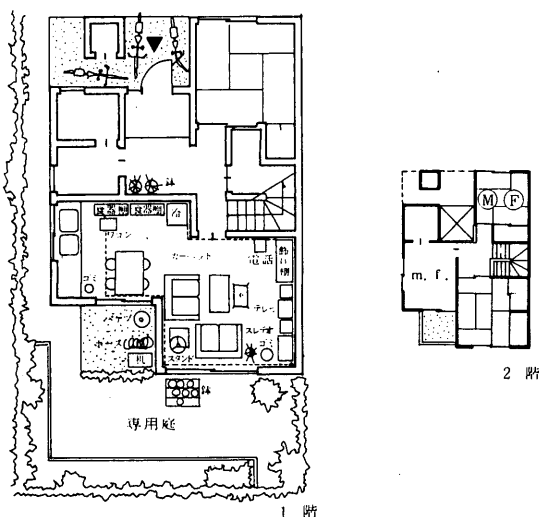
家族 5人 (M 41 F 37 m11 f10 m7)
 食事・団らん・接客がLDKに集約されている。接客時に台所が見られるのを気にはしているが、家族のつながりのあるワンルーフのLDKに満足している。尚、台所を隠している住戸も多い。LDKの家具配置は典型的で、狭いなかうまく配置している。南2室を子供3人で使い、6畳が寝室、4畳が勉強室。

図2・1 LDKワンルーフの例〈石神井〉



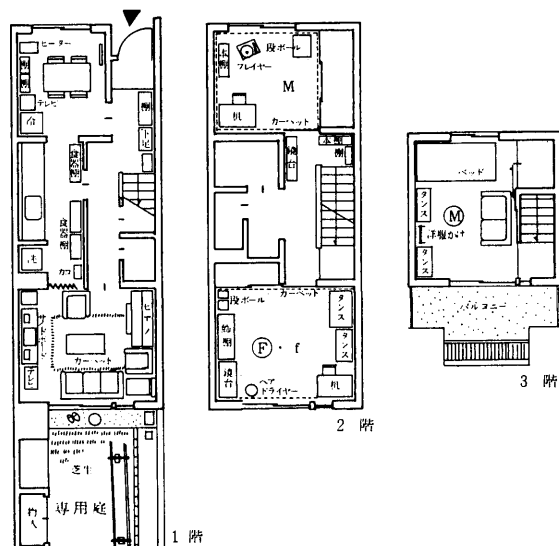
家族 4人 (M 30 F 29 m4 f2)
 食事・団らん・接客といった公的生活が2階のLDに集約され、日中、主婦は殆どこの室にいる。
 8畳大の2階北室が家族全員の就寝に充てられている。1階南和室は、客用寝室として空けてあり、庭へ出るのに通る位で日常的には殆ど使われていない。1階北室を子供のプレイルームとし、LDは散らかさないようにしており、来客時にも問題は少ない。

図2・2 LD-K型の例〈行徳〉



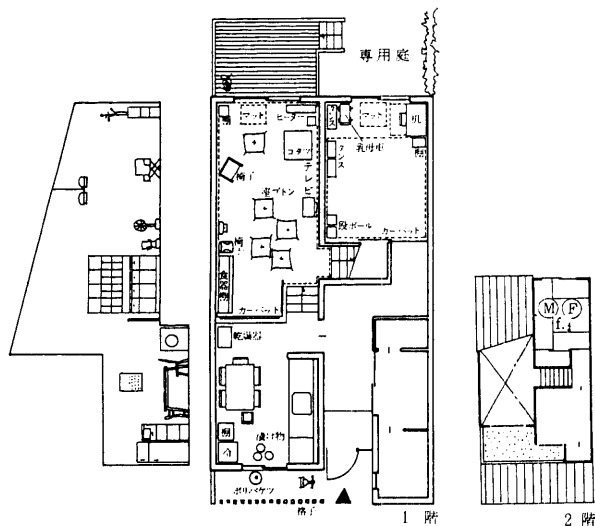
家族 4人 (M 30 F 30 m6 f4)
 Lで団らん・接客，DKで食事という典型的な例。LとDKの一体感が強く、客との食事はDKですが、家族の食事は後になることが多い。ソファがDK部に食い込みDKが圧迫されており、DKが狭いという不満が強い。一体感のある公室構成を評価しており、LD-Kの分節を希望している。
 1階北室は家事室。2階南和室は客用寝室として空けてある。

図2・3 半ば連続したL-DK型の例〈南桜井〉



家族 4人 (M 37 F 37 M12 f7)
 整えられたLは、家族のための場というより“応接間”としての性格が強く、いつもきちんとしておくよう心掛けられている。家族の団らんには北側の狭い食事室を使うことが多い。必ずしも一般的ではないが、接客意識が住み方に強く作用した例である。
 独立性の高い3階洋室は主人の寝室兼書斎になっている。

図2・4 L-D-K型の例〈諏訪〉

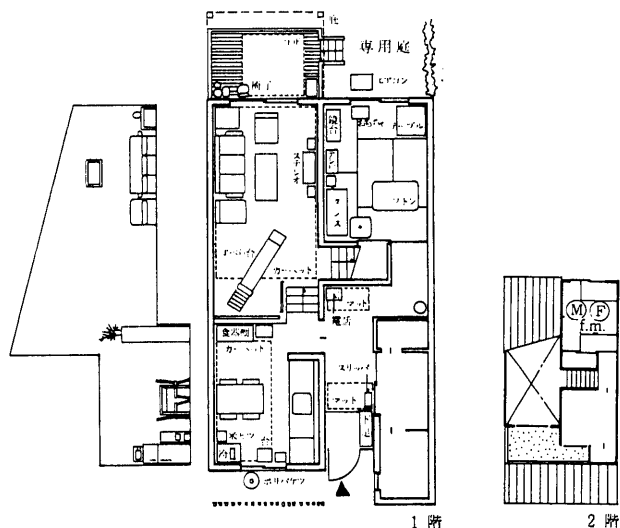


家族 3人 (M34 F28 f2)

くつろぐ時の坐式指向の強さや、幼児のために室を広くしておきたいとの理由で、Lにはソファを置かず、坐式で団らん・接客を行なっている。食後、DKがそのまま団らんの場となることもある。客との食事にはDKを利用。

1階和室は書斎兼客用寝室で、昼間は子供の遊び場、夜は夫婦の静かな語らいの場ともなる。2階洋室は納戸兼アイロンの場。

図2・5 坐式指向の強い住み方の例〈高野〉

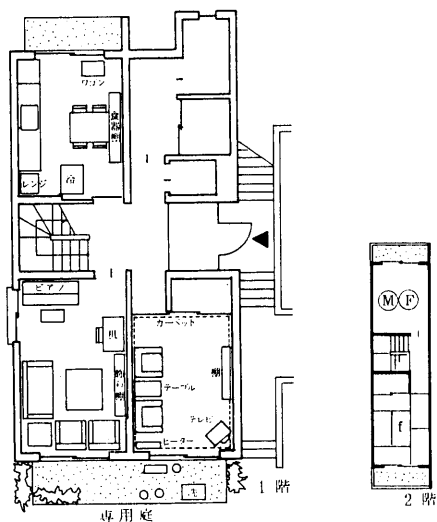


家族 4人 (M37 F29 f5 m2)

Lにはソファを置いて“応接間”とし、日常の団らんには1階和室を“茶の間”的に利用している。Lで団らんすることもあるが、どちらかというとな人の室。Lはいつもきちんとしておくようにしているが、和室のほうは散らかっていても気にならない。普段の食事はDKだが、客との食事には和室を使う。

2階の洋室は、子供の遊び場兼客用寝室。

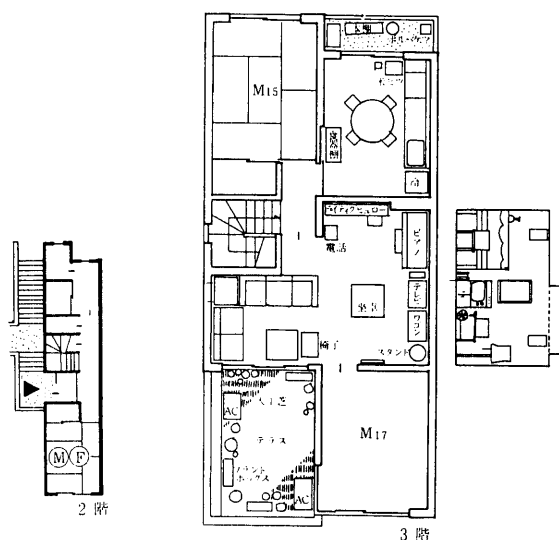
図2・6 Lを接客室にした住み方の例〈高野〉



家族 3人 (M35 F34 f2)

1階和室を“ファミリールーム”と呼び、団らん・子供の遊び・日中の主婦の居場所等、散らかしておける室として確保している。これに対し、Lは、接客・音楽鑑賞・ピアノ演奏・読書等、大人のスペースとしていつもきちんと保たれている。特殊な住み方ではあるが、2つの居間を目的・気分により使い分けている。DKでは大型冷蔵庫の置き場がなくて大変困っている様子。

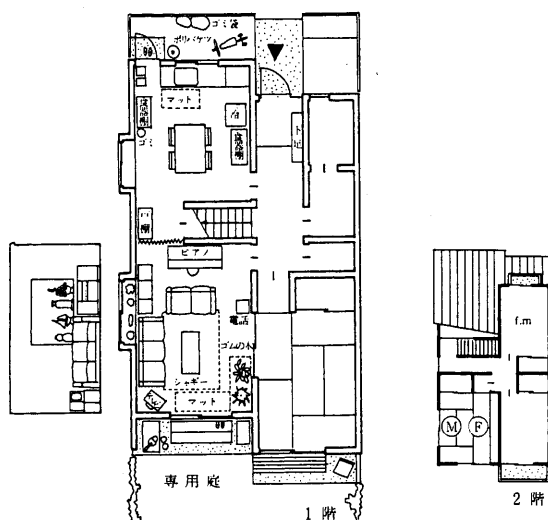
図2・7 ファミリールームを確保した例〈八事〉



家族 4人 (M44 F46 M17 M15)

11畳大のLは、団らん・接客に使われ、人工芝を貼ったテラスに面するアルコーブにソファを配し、トップライトの下には坐卓を置き、椅子式と坐式の2つの場が形成されている。“床の間のあるちゃんとした客間が欲しい”こと以外は現在の住まいに大満足で、現状を評価してL-DKの分節を好ましいと考えている。

図2・8 Lに椅子式と坐式の2つの場をもつ例〈八事〉

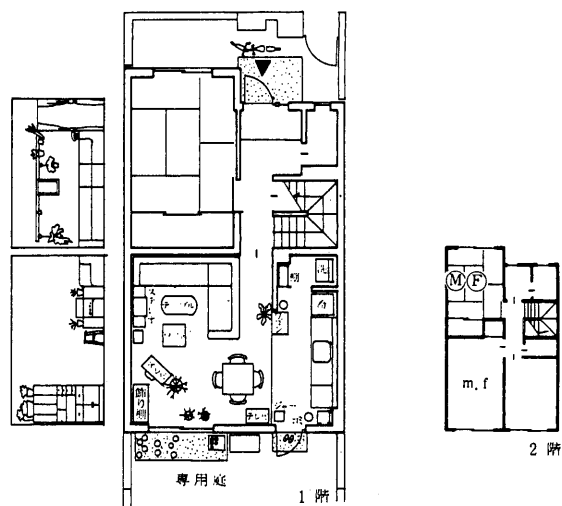


家族 4人 (M42 F35 f9 m6)

この団地ではLを団らん・接客に使うのが一般的であるが、この例は、Lを接客専用室としたやや特殊なものである。このため、食事・団らんといった家族の日常生活はDKが中心となるが、それだけでは足りず、2階南洋室を家族全員の“勉強部屋”として公室的に利用している。

1階和室は、親の宿泊用に空けてあり、普段は殆ど使わない。

図2・13 Lを接客専用にした例〈浦安〉

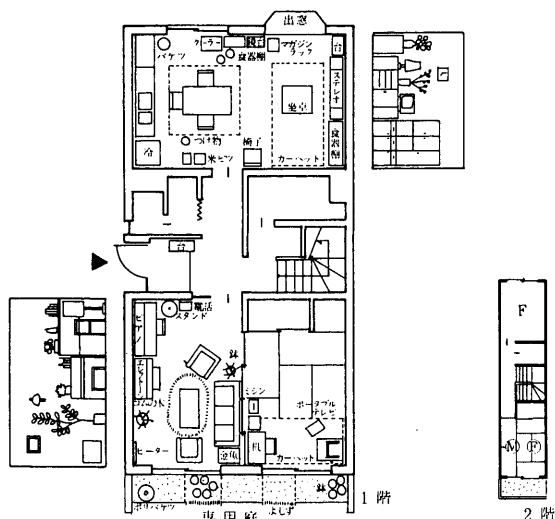


家族 4人 (M45 F36 m11 f7)

北和室は、時々泊まりに来る親のために空けてあり、主人の客等の改まった客を通すのにも利用。冬はここにコタツを出して団らんにも使う予定。LDKはきれいにしつらえられており、食事・団らん・親しい客をもてなす場となっている。普段は、子供達は床に坐り、主人はソファの上に寝ころんでいることが多い。

2階の洋室は、主人が書斎として使っている。

図2・14 ワンルームのLDK+和室の例〈永山〉

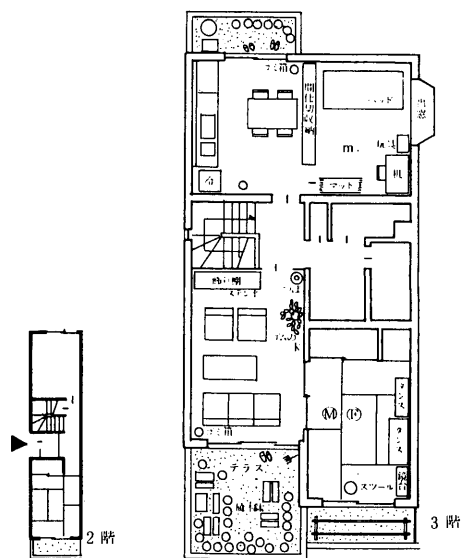


家族 3人 (M39 F36 F12)

食事・団らんには北側のLDKが使われ、この例では食卓の他に坐卓が置かれているがソファを置く例も多い。南洋室は、改まった客を通す室で、ピアノの練習や団らんに使うこともある。気楽に使える広いLDKを評価しており、公室構成はLDK一体を希望。

1階和室は主人の書斎兼客用寝室に充てられている。

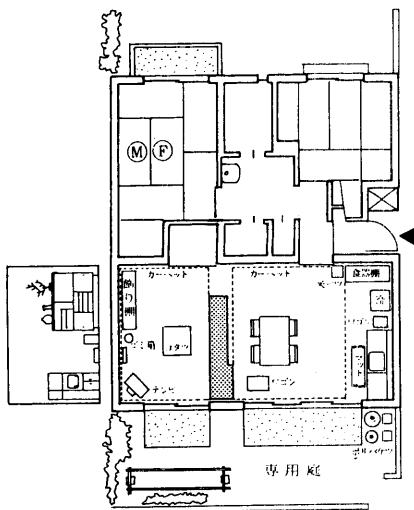
図2・15 LDKを家族本位に使っている例〈楽園町〉



家族 3人 (M43 F35 m11)

北側のLDKを半分に仕切り、DKと子供室にしている。食事はDK、団らん・接客には南洋室を使っている。下階を客間（両親の宿泊用）と主婦の洋裁のアトリエに充て、主階に家族の生活をまとめた住み方。将来は子供室を下階におろし、あとを夫婦寝室にする予定。主人が建築家で家全体がきちんとしている。

図2・16 LDKの半分を子供室にした例〈楽園町〉

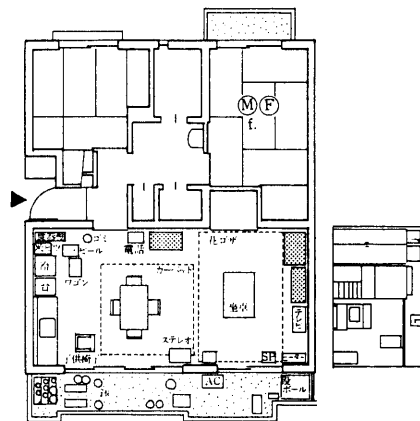


家族 2人 (M30 F22)

この団地の最も一般的な住み方で、夕食・団らん・接客・読書・書きものといった殆どの生活が南側の洋室に集中しており、カーペットの上にコタツを置き、坐式の起居様式がとられている。広いDKは“台所”と呼ばれ、朝食には使われるが食事の場という意識は弱い。

北の4畳半には使わない家具が置かれ、客用寝室となっている。

図2・9 洋室を茶の間の的に利用する例〈下細井〉

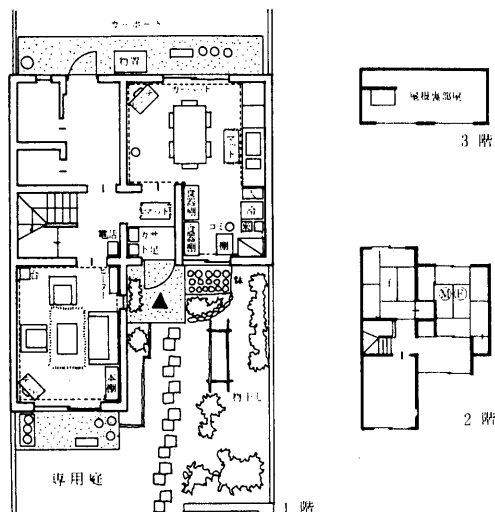


家族 3人 (M26 F26 f0)

可動式収納ユニット(図中網目部)を壁際に移動し、南2室をワンルームにした例。広いワンルームにしているが、“ソファを置くと室が狭くなる。くつろぐのには坐式がよい。”との理由で、一部に花ゴザを敷き、夕食・団らん・接客は坐式でなされている。

6畳の和室ではベッドを使っているため、他の家具が殆ど置けず、書斎兼客用寝室の4畳半が納戸のようにになっている。

図2・10 順応部分をワンルームにした例〈下細井〉

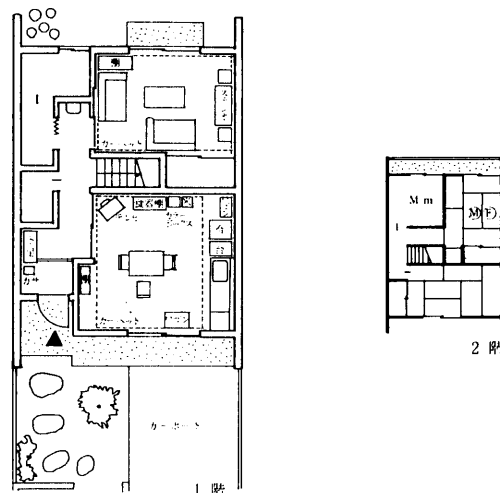


家族 3人 (M40 F38 f7)

1階南洋室には、接客を意識してソファがきちんと整えられている。冬にコタツを出してここで団らんすることもあるが、普段の団らんにはあまり使わない。大きな食卓を配したDKが食事・団らんの中心となっている。食事と団らんが一体となった生活を評価しており、広々としたLDKワンルームの公室構成を希望。

2階の洋室は、娘の勉強部屋。

図2・11 DKが生活の中心となった例〈庭代台〉



家族 4人 (M39 F37 M12 m8)

DKにはテレビが置かれ、食事・団らんの場として日常生活の中心となっている。1階北和室は、客を通す室として洋風に仕立てられているが、“大人の居間”として団らんに使うこともある。又、2階の南和室にもテレビを置き、坐式で気楽にくつろげる“子供の居間”として使い分けている。ソファで食事はしにくく、客との食事にはDKが使われる。

図2・12 複数の公室を使い分けている例〈名谷〉

3-2. 公的生活の展開と意識

3-1では公室構成との対応で団地別に公的生活の展開をみた。ここでは、全体を通して公的生活展開の背景にある住様式・住要求・住意識について考察する。

(1) LDKの分節要求

公的生活の展開は公室の構成に規定される面が強く、LDKの分節に関する希望(表5)は居住者の現在の住み方を基に表明されることが多い。この点を考慮し、3-1の団地別検討にインタビューで得られた分節の希望理由(図3)を加え、LDKの分節要求を分析した。

・L独立要求とLD一体要求

図3にみるようにLを独立させたいという要求は強い。居住者は一般にLを団らんの場であると同時に接客の場とも考えている。いつ来るか分からない客を想定し、Lをいつもきちんと整えておきたい、汚れやすい台所や食事

室(特に幼児のいる家庭)とは別にしておきたいという気持ちが強く作用している。又、接客時に家族が食事する場を確保したいとする要求もL独立につながる。L独立要求は客を意識した場合に強いが、日常の家族の居場所としては、食事と団らんで気分を変えたい、Lには落ちつきが欲しいといった要求がL独立の中にある。

LDは一体となっているほうがよいという要求は、食事と団らんの連続性や家族の一体感を大切にしたい、室は細分化せず広く使いたいといった理由にみられるように、家族の日常生活の快適性を重視する考え方が背景になっている。L以外に専用の接客室を確保した住み方の多い〈庭代台〉や〈楽園町〉では、接客から解放されたLをDと一体に使用とするLD一体希望が過半数を占めている。

・DK一体要求とK分離要求

DKスタイルは、その便利さや台所作業中の主婦と食事の場にいる家族とのつながりで現在でも高く評価されている。K分離要求には、台所は汚れるとか臭気や煙が他室へ広がるのを嫌う気持ちや、食事の場やLから台所が見えると落ちつかないといった日常生活面での意識もあるが、客に台所を見られたくないという主婦の心理が最も強く反映されている。

以上のことから、公的空間を分節しようとする要求の背景には接客意識が、一体化しようとする要求の背景には家族の日常生活を重視する意識が認められる。

(2) 公室のしつらえと起居様式

団らんや接客に使われるLには、8割以上の家でソファが配置されている。配置のパターンには、ソファを向かい合わせて配置する対向型や直角に配置するL型といった型にはまったものと、横に並べただけの一例型が多くみられる。一例型は改まった客との応接には不自然な配置で、Lの間口の狭い(3M以下)家や、幼児の動き回るスペースを狭いLの中に確保しようとする家、床の上

表5 LDKの分節に関する希望

	LDK	LD-K	L-DK	L-D-K
石神井	・(0)	36(8)	36(8)	28(6)
行徳	7(1)	29(4)	50(7)	14(2)
南桜井	17(4)	17(4)	44(10)	22(5)
高野	9(3)	9(3)	65(23)	17(6)
八事	・(0)	11(2)	53(10)	36(7)
下細井	29(5)	6(1)	53(9)	12(2)
庭代台	36(5)	28(4)	36(5)	・(0)
名谷	23(3)	15(2)	31(4)	31(4)
諏訪	8(1)	25(3)	25(3)	42(5)
浦安	21(4)	5(1)	21(4)	53(10)
永山	8(1)	8(1)	84(10)	・(0)
楽園町	23(5)	36(8)	36(8)	5(1)
計	14%(32)	18%(41)	46%(101)	22%(48)

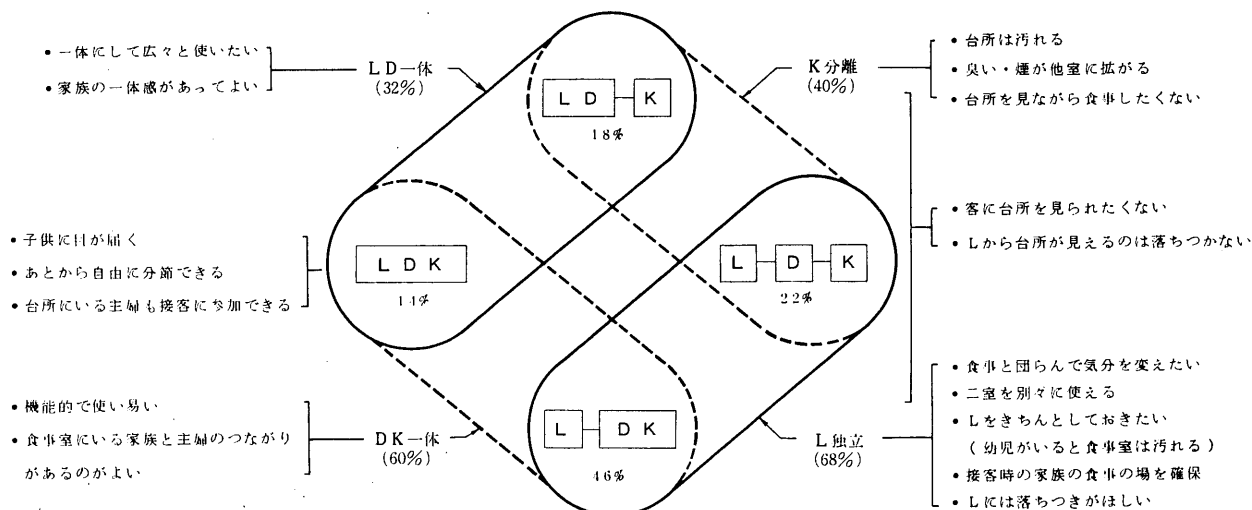


図3 LDKの分節希望とその理由

で足を伸ばしたり寝ころんだりしてくつろぐのを好む家によくみられる。又、Lの接客専用度が高い家では対向型やL型の整った配置が多く、Lの他に接客専用の室があってLをくつろぎ主体の場とする家では、一列型やソファを置かず坐式でLを使う例が多くなる。〈八事〉のDタイプのようにLに面積的余裕のある場合には、Lの中に、ソファをきちんと整えた椅子坐の部分と、坐卓を中心としたユカ坐の部分の両方をしつらえる例も多い。対向型やL型にソファを配置した家でも、普段はソファを背にしてカーペットの上に坐することの多い折衷式の起居様式や、冬には炬燵を出してユカ坐の生活をする例もあり、くつろぎ時のユカ坐指向は根強いと云える。勿論、日常生活においてソファを利用することも多いが、どちらかというソファは接客等の改まった場合の使用が主となっている。接客にはソファという考えは都市において浸透しつつあり、一般社会生活の洋式化あるいは椅子坐化や、洋室にはソファを置くものといった観念が普及の背景になっている。10～15㎡のLで家具が床面積を占める割合は、椅子坐中心の家で30～40%、折衷式の家では25～30%に及んでいる。Lでの生活は、ソファの置かれた〈図〉の部分为主として接客用、家具に占有されずに残された〈地〉の部分がくつろぎ用とみなすことも可能であろう。

次に、利用を定めた室について、和室がよいか洋室がよいかを訊ねた結果を、和室がよいと答えた者の割合で示したものが表6である。尚、夫婦寝室以外の室では、和室要求と主婦の年齢との間に相関はみられなかった。

表6 各室の和室希望度（全223例）

くつろぐ室	食事室	客を通す室	夫婦寝室	子供室
30 %	5 %	48 %	63 %	10 %

くつろぐ室の和室希望は約3割を占めるが、地域性の強い〈下細井〉〈高野〉では和室希望が半数を越す。又、洋室を希望している中にもカーペットの上に坐る洋風坐式の生活を考えているものもあり、くつろぎ時の坐式指向の根強さが感じられる。食事には椅子式がほぼ定着したと考えてよい。客を通す室の希望は、和室と洋室とが相半ばし、和洋両方を希望する例もみられた。これは、客はソファをしつらえた洋室に通すものだという観念と、きちんとした和室での接客への憧れ、客との食事や客の宿泊を考えたときの和室の転用性の評価が拮抗した結果と考えられる。

(3) しつらえ意識

室をいつもきちんと整えておこうとする意識を〈しつらえ意識〉と呼ぶことにする。現在生活している各室に

ついて「常にきちんと整えておきたい」と考えているかそれとも「多少は散らかしておける」と考えているかを〈高野〉〈諏訪〉〈永山〉〈楽園町〉で調べた。その結果を公的生活の展開別に、各室での公的生活の内容と対応させて示したのが表7である。接客に使おうとする室では、

表7 公室での生活としつらえ意識

	EFG 型	E-FG型	EF-G 型		E-F-G型	
	EFG	FG	EF	G	F	G
きちんと整えておく	8 例	29	15	29	2	9
どちらともいえない	1	4	8	2	2	0
多少散らかしてもよい	2	0	8	0	4	0

団らんの場合と兼用される場合でも〈しつらえ意識〉は強いが、改まった客を通すことがなく家族だけでくつろぐ室では弱くなる傾向がみられる。Lは団らんの場合と同時に家族以外の他者を招き入れる接客の場でもあることが多く、Lには〈しつらえ意識〉が働き、ある程度散らかしても思うままにくつろぎたいとする日常生活の要求との対立も起こり得る。この結果、家族主体に考えるべき団らんの場にきちんとしておかなくてはという心理的負担が生じ、室のしつらえも他者を意識した〈外向き〉なものになりがちで、日常生活にとっては必ずしも居心地の良い場とはならない。この問題は特に、狭い居間に団らんと接客とが重なる場合に大きい。

本章の分析結果を要約すると、

- ・食事の場と家族が集まりくつろぐ場とは分離し難い。
主婦のいることの多い台所や食事室には子供がよく集まる。又、団らん・くつろぎには飲む・食べるという行為が重なることが多い。
尚、一方には、台所や食事室とは別の場所で落ちついてくつろぎたいという要求もある。
- ・くつろぎ時の起居様式にはユカ坐指向が根強く残る。
ソファは接客を意識し洋室をそれらしく整えるために配置されることが多く、くつろぎ時には、ソファだけでなくユカの上に坐ったり寝ころんだりする生活も多い。
- ・客を想定した〈しつらえ意識〉が潜在的に存在する。
家族以外の他者である客に対して〈身構え〉、接客の場を確保し、いつもきちんと整えておきたいという意識が程度の差こそあれ存在し、家族の日常生活を圧迫することがある。

4. 公室の計画

4-1. 公的生活の展開と公室計画

公的生活の分節は、住まいに対する様々な要求を居住者が自らの価値観に基づき総合的に判断して決めるのが望ましく、今後の公室の在り方を考える上では、幾つかの生活展開を想定すべきであろう。以下、分析でみられた4つの公的生活の展開について、対応する公室構成と計画上の問題点について考察する。

① EFG型の生活展開

家族の一体感、食事と団らんの連続性といった日常の家族生活を重視し、客に対する特別な身構えの強くない生活展開で、広い公室を確保できる意義は大きい。広い公室は、様々にしつらえる可能性を有し、居住者自身によって分節することも可能である。

LDKワンルームで計画する場合には、台所のつくり方に留意する必要がある。台所で作業中の主婦が家族の団らんや客との会話に参加できる利点を生かすためには、作業中の主婦を生活側へ向ける工夫が必要である。又、客に台所を見られたくないという主婦の心理も考慮し、十分な収納の確保を図ると同時に、機能性だけでなくデザイン面にも十分配慮する必要がある。

台所を独立させたLDKの構成ではこのような問題はないが、DKの便利さも生かすべく、独立した台所内でも簡単な食事位はできるよう計画されるのが望ましい。

② E-FG型の生活展開

公室を計画する際に想定されることの多い公的生活の展開で、これに基づくLDKやLD-Kの住戸例は多い。団らんと接客の重なりは、居住者の接客に対する考え方にもよるし、居間を整えておくことの難しい家では問題を起こすことが少ないが、食事と団らんの分離は日常生活の上では必ずしも好ましいとは言い難い。

LDKの構成では、一般に居間を団らんの場と想定するため、食事の場の居住性が軽視され、台所の一部で食事をしている感じになり易いが、広さ・採光には十分配慮する必要がある。食事の場が快適になったLDK型住戸では、EF-FG型の公的生活の展開も生まれ、食事と団らんが分離される問題は小さくならう。

LD-Kの構成では、DKの便利さは失われるが、食事室の居住性は確保され易い。この場合も、食事室にある程度の広さが与えられれば、公的生活の展開はEF-FGあるいはEF-FG型となる可能性がある。

③ EF-G型の生活展開

戦後の近代化型住居の流れの中(特に公共住宅)では、想定されることの少なかった公的生活の展開である。確

かに戦後の狭小な住宅において日常生活を圧迫してまで接客室を確保することは問題であった。接客空間=封建的という図式がアメリカの日常主義の影響と相補しつつ計画者の頭の中に今日まで残り続け、住居の中からはっきりした接客空間は姿を消し居間の中にその機能が内包されてきた。一方、居住者の内には〈ソト〉に対する身構えが根強く残り、接客意識が居間に作用し、一番重要なものとして考えたはずの家族の日常生活が圧迫される結果を生じている。接客を独立させる意義とその可能性については次節で詳述する。

④ E-F-G型の生活展開

分析事例中では細分化された室を持つ住戸に幾つかみられた展開であるが、その数は少なく、居住者の評価も必ずしも良くない。100㎡程度の住戸でこの展開を想定した計画を行なうことは、公室を細分化することにもなり現実性が薄い。

4-2. デュアルリビング

住居内の公的空間には、家族の日常生活の連続性や公室の広さ指向を背景とする一体要求と、主に接客意識を背景とする分節要求とが共存する。100㎡程度の住戸においては、両者を同時に満足させることがある程度まで可能であると考え、ここにその考え方を説明する。

・ 団らんと接客の分離

公的空間の中に存在する2つの背反する要求、つまり、接客を意識し室を整えておきたいという要求と、家族のための生活の場は多少散らかしても好きなように使いたいという要求を共に満足させるために、〈居間〉から他者を意識したオモテ向きの要素を切り離し、家族主体の生活の場〈ファミリールーム〉として再生する。

・ 食事と団らんの一体化

こうして確立された〈ファミリールーム〉は、食事と団らんとつながりを重視して計画する。改まった客の入らない〈ファミリールーム〉には、DKの使い易さを生かし、台所を内包しても問題は少ない。

・ 接客空間の活用

〈ファミリールーム〉と分かれたオモテ向きの空間は、単なる接客の場としてだけでなく、大人達の落ちついたくつろぎの場、あるいは異種の公的行為の同時並行を保証する場として日常生活にも活かされるよう〈フォーマルリビング〉として計画される必要がある。又、〈ファミリールーム〉とは異質な空間として、均質な住空間の中に変化を付与することも可能であろう。

以上のような考え方でつくられた2つの公室から成る公室構成を〈デュアルリビング〉と名付ける。これは、EF-FG型の公的生活の展開を想定したものであり、

中心となる目標は〈ファミリールーム〉の確立にある。L-DKの公室構成とは想定している生活展開を異にするが、L-DK型公室もDKを充実することによって、E F-FG型の展開が十分に予想される。

〈デュアルリビング〉は、2つの公室が狭小とならないという条件の下に成立する。又、〈フォーマルリビング〉は、それなりの広さと質を持たない場合、計画意図通りには使われないし、和室とするか洋室とするかで使われ方は異なる。和室にした場合は、和室がきちんとした室ならば台所の見える〈ファミリールーム〉へ客を通すことは少ないと思われるが、〈ファミリールーム〉へソファを置きそこへ客を通すことも起こり得る。洋室にした場合は、客を通す場としては安定するが、客との食事や客の宿泊が難しい。100㎡程度の規模の場合、夫婦寝室を和室で計画し、洋室の〈フォーマルリビング〉とつなげて使えるような方法もあり得る。

〈デュアルリビング〉の考え方は、一般的な接客意識を想定してのものであるが、接客に対する意識が異なる場合には、EFG型の生活展開を想定した広いワンルームの公室構成も望ましい在り方の一つと考える。

最後に、〈デュアルリビング〉を住居全体の中で位置づけ、住居平面計画として考えてみたものを示す。

2つの公室の性格をはっきりさせるため、フォーマル—インフォーマルの軸を設定した。この軸には、きちんと—散らかし、大人—子供、社会—家族、静—動といったイメージが重ねられている。この軸を公—私の軸と直交させて住居全体にかぶせてみた。夫婦寝室の位置づけがやや曖昧であるが、各ゾーンにそれぞれの室をあてはめてみたのが図4である。方位については、どちらの公室を南面させてもよく、それぞれに長所・短所がある。仮に100㎡を想定し面積配分を考えたのが表8である。公室部分にできるだけ面積を割いた場合を考えたが、玄関の位置や住居形式により廊下部分の面積は変わり、この表ほどは公室に割けないこともある。子供室については順応型を想定した。尚、このような作業を通して、計画上の問題点を今後さらに検討する必要がある。

表8 100㎡住戸の面積配分例

公室	ファミリールーム	20 ㎡ (12畳)	37 %
	フォーマルリビング	17 (10)	
私室	夫婦室 (1.5畳の収納含)	15 (9)	35 %
	子供室 (6畳×2)	20 (12)	
	台 所	8 (5)	28 %
	浴室、便所等	3 (5)	
	通路、玄関	8 (5)	
	収 納	4 (2)	

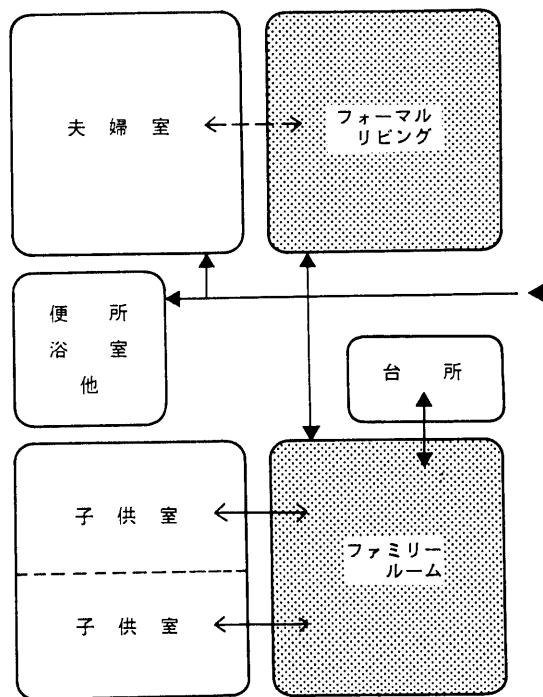
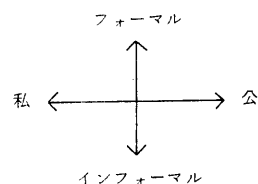


図4 デュアルリビングのダイヤグラム例

あとがき

本研究は、都市を中心とした集合住宅の住み方調査を基に分析を行なったもので、結果の適用には自ずと限界があり、地方の住宅における公室の計画については新たな研究が必要であろう。本研究で検討不十分だった〈和室〉の位置づけについては、今後、研究を進めて行くつもりである。これからの住宅における公室の在り方については、幾つかの可能性があり、様々な試みがなされることを期待したい。

本研究の調査・分析にあたっては、芝浦工業大学講師の小柳津醇一氏、畑聡一氏、東京工芸大学元助手の高橋文男氏、及び東京大学大学院生友田博通氏、小林秀樹氏らの協力に負うところが大きく、又、貴重な助言をいただいた千葉大学助教授の服部幸生氏、大阪市立大学講師の杉山茂一氏、楽園町団地調査を協力していただいた名古屋大学柳沢研究室の方々に謝意を表します。

〈研究組織〉

研究主査 鈴木 成文 東京大学教授
 委 員 初見 学 東京理科大学講師
 協力者 三川比佐人 東京大学大学院生